

## VII： 小論文集

これまで書きかめた雑文の中から、皆様方の目に留めていただければ、と思う文章を幾つかリストアップしました。時間のある時に読んでいただき、仁志田という男はこんなことを考えていたのかと思いを馳せていただければ望外の幸せです。

### 1. 「新生児に生きる」

#### 「新生児に生きる」

わたしは あなたへ 一生（いのち）を ささげることにしました  
あなたは まだ 生まれて間もないのに  
いぶかしげな眼差しで わたしを 見つめましたね  
わたしは あなたの瞳の奥に  
長い間 さがし求めていた 無垢の世界を 見たのです  
あなたは わたしに 思い出させてくれたのです  
わたしが かつては あなたであったことを  
そして 無垢の心を 持っていたことを  
わたしは 大声で 叫びたい気持ちなのです  
あなたに生きることが わたしの天職である 幸せを

### 2. 周産期・新生児学会 40 周年記念誌刊行に寄せて：困った時の『温故知新』

1972年にシカゴ大学で新生児のフェローを初めて以来30余年新生児・周産期医療に携わった者として、この記念誌は単に学会設立40周年というだけでなく、ようやく真の周産期・新生児学会 (Academy of Perinatal and Neonatal Medicine) が誕生したというある感慨に耽る思いがこみ上げる。筆者がこの分野に足を踏み入れた頃は、産科は「産婆学」と、また新生児医療は「盆栽並みの趣味の医療」と見なされ、それに専念する医師は変わり者と揶揄されていた。しかしこの間の我国の周産期医療の進歩には目を見張るものがあり、それまでの経験と感が中心であった医療に、学問とそれに裏打ちされた技術が加わり、産科と新生児科の専門家の表裏一体の共同作業によって世界に冠たる実績を挙げるようになった。その結果として我国の80大学において、残念ながら産婦人科領域ではまだ周産期の概念を理解しない教授がいるようであるが、少なく

とも小児科教授の中では大学病院内でのNICUの運営の困難さに直面しているものの、新生児を抜きにして小児科医療は存在し得ないことが認識されている。

日本新生児学会は既にスタートに時から産科と小児科が中心となり、新生児医療を超えて既に周産期医療の専門学会であった。さらに小児外科・麻酔科・病理などからの同好の士が加わっていたため、長い期間政治的綱引きなどのトラブルを避けるため、不文律ながら年に一度の学会を主催する以外の学会活動をしないうのが当時の指導的立場にあった先達の生活の知恵としてのコンセンサスであった。それが現在のような多くの委員会が出来て対社会的活動を行うようになったのは、全国に厚生省主導で周産期センターが設立され、すでに周産期医療の重要性とニードは一般の人たちの常識のレベルとなった1990年代末である。最初に出来たのが将来構想委員会であり、その委員長が故桑原先生（当時東大産婦人科助教授）であった。彼は、坂元正一先生の命を受け日本周産期学会を立ち上げる事務方をした責任上、ねじれ現象にあった両学会を一つにまとめることを任務と考えていた。ねじれ現象とは、新生児学会そのものも実質は周産期学会であり、また周産期学会はハイグレードのシンポジウムを年一回主催することと国際学会の受け皿となることが使命であったが、会員は限られた数のみならず新生児学会とほとんどオーバーラップしていた。さらに、周産期の専門医制度は学会単位で行うという規約上、新生児学会の名称は不適切で周産期学会と名称上の齟齬が明らかとなったからであった。残念ながら桑原先生はその志半ばで急逝し、残された仲間がその意志を継承して両学会の一体化となり、今日の記念誌刊行となったのである。

実はその前段階として、標榜科（未熟児科）を巡って、もともとは同じ学会仲間であった産婦人科と小児科の専門家が諍いの場に引き出されたことを契機に、両学から周産期合同委員会が立ち上がり両学会の摺り合せを行ってきた。その中心は当時の若手医師（小生をはじめそのほとんどは既に老兵と呼ぶのがふさわしい立場となっているが）であり、同じ周産期の医療現場で苦労を共にし、お互いの苦しみや悩みを共有できる仲間であったところから、その委員会は友好的な雰囲気の中で今日の両学会の合同に至る幾つかの重要なフットステップを作り上げることが出来た。そろそろ、本学会の第一線を退くものの一人として、その組織に関与したことを密かな喜びと感じている。本学会が更なる発展をする為に必要な知恵の幾つかが、この歴史経緯の中に見出されるであろう。『温故知新』である。

### 3. Hot Topics in Neonatology 2006

#### 「Hot Topics とルーシー教授とアベリー教授」

例年のごとく12月のワシントンでHot Topics in Neonatologyが開催され、日本から田村教授を団長に8名の新生児科医師が参加した。今回はこの会の創始者であり名実共に運営の中心となっているルーシー教授が80歳の誕生日を期に引退するという噂が流れ、これまで彼に個人的にお世話になった日本の新生児仲間から沢山のBirthday card and present を預かった。学会開催の前日、ルーシー教授のスイートルームで行われていた家族の誕生パーティに、日本人の一群がバタバタと押し掛けてワインの乾杯に参加し、記念撮影をして嵐のように去っていったのには、彼らも何のことかと驚いたことであろう。ルーシー教授はアメリカ小児科学会の機関紙 Pediatrics の Chief Editor を30年も努め、それを小児科関連の雑誌では世界トップのレベルとした名編集長として知ら、あのキシンジャー国務長官さえも入会を保留とされたワシントンで一番（ということはアメリカで一番）のプライベートクラブの会員となっている。これまで何度か、そのコスモスクラブに日本人のグループが招待されたが、いくつかの忘れ難いエピソードがある。ある時私が座っていたテーブルにルーシー教授が微笑みながら寄って来て、「ヒロ、これはアインシュタインがルーズベルトに原爆を開発すべきだという手紙を書いたテーブルだよ。」と言ったのである。日本への原爆投下云々を議論する時代は過ぎて、さり気無くそんなことが語れる平和な時代になったことを思ったものであった。また、アベリー教授やベエアマン教授など教科書の名前になっているような錚々たるゲストと親しくグラスを交わして話をする食前のパーティで、ある若い医師がまじまじと本人の顔を見ながら、[Are you really Prof. Avery?]と尋ねたのには、私のほうがひやひやする思いであった。今回もマリー・アヴェリー教授の80歳の誕生パーティが企画されていたコスモスクラブに、私と田村先生が招待された。実はアヴェリー教授はアルツハイマーに罹患し、その時が最後の公でのパーティではないかと言われていたので、なんとしても出席したいと願っていた。1974年私はアメリカから帰る前に是非とも新生児医療の真髄を尋ねたいと、当時モントリオール小児病院におられたアヴェリー教授を訪ねたのであるが、見ず知らずの日本人の若者に時間を割いてベビーバードのレスピレーターの話しをしてくれたのである。日本に帰り、そのベビーバードを開発したデレモス博士とたまたま懇意になったのも、共にジョンズホプキンス仲間であることがきっかけとなった。アベリー教授は、正に近代新生児医学の歴史そのものであり、ユックリながら思い出すように語る昔話は、田村先生共々得がたい宝物を得るような気持ちであった。Hot Topics とルーシー教授とアベリー教授の組み合わせも、

やがて歴史の1ページになることであろう。

写真1 : Lucy 先生のパーティ。



写真2 : Avery 先生のパーティ

